「池上」と洗足池

名勝洗足池公園-⑦

「池上宗仲夫妻坐像」（通常非公開）大坊本行寺蔵
正徳4年（1714）造立　区指定文化財

大坊本行寺内「日蓮上人入滅の旧跡」
都指定旧跡

池上と洗足池の関係について、日蓮や勝海舟にまつわることはこれまでの記事でご紹介しました。では、そもそも日蓮が池上を目指した理由であり、本門寺創建にも大きく関わった池上宗仲とはどういった人物だったのかというと、実はここにも洗足池との繋がりが見られます。

宗仲については生没年を含め多くのことがわかっていませんが、日蓮の臨終に際して土地を寄進し本門寺が創建されたことが知られます（居館は現大坊本行寺〔池上2-20-5〕）。そのほか、現存する日蓮からの書状により、大工棟梁の家系であり「右衛門大夫」という身分であったこと、同じ日蓮信者の弟がいたことなどが判明しています。また、本門寺大堂に安置される「木造日蓮聖人坐像」（重要文化財・正応元年〈1288〉造立）に納められた日蓮遺骨の容器（骨蔵器）には、施主の一人として「大中臣宗仲」の名が刻まれています。この苗字は藤原氏の祖・中臣鎌足以来の系譜に連なる一部の貴族にのみ伝わるものであるため、池上氏も由緒ある一族であったことがうかがわれます。

池上氏の由来については、洗足池のほとりに鎮座する千束八幡神社（南千束2-23-10）に伝承があり、承平5年（935）に起こった平将門の乱を平定するため藤原忠方という人物が京から派遣され、そのまま当地に館を構えて八幡神社を氏神として祀り、池の上手に立地したことから池上氏を称したといわれます。つまり、現在の地名「池上」は洗足池が由来となっているということです。日蓮の旅路に随行した直弟子・日興による日記『宗祖御遷化記録』（注：遷化＝死去）には、宗仲邸の所在地が「武蔵国千束郷池上村」と記されていることからも、当時は「千束」の方が広域的な呼称であったことがわかります。今でこそ「池上」とは主に本門寺やその門前の一帯を示す地名となっていますが、かつてはおおよそ現池上1・2丁目付近が「下池上村」、3丁目付近が「久ヶ原村」、4・5丁目付近が「堤方村」、6～8丁目付近が「徳持村」に属しており、一方で現仲池上の一部と上池台地区は「上池上村」に属していました。このことからも、むしろ洗足池に近い地域が本来の「池上」だった可能性が考えられます。なお、江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』では「かつて本門寺山麓まで千束（洗足）池が広がっていた」とする説も紹介されていますが、もとは灌漑用のため池というなりたちから考えると現実的ではなく、池の規模や位置は大きく変わっていないと思われます。